

源氏物語

玉鬘

紫式部

青空文庫

火のくにおひいでたれば言ふことの
皆恥づかしく頬ほの染まるかな（晶子）

年月はどんなにたつても、源氏は死んだ夕顔のことを少しも忘れずにいた。個性の違った恋人を幾人も得た人生の行路に、その人がいたならばと遺憾に思われることが多かった。右近は何でもない平凡な女であるが、源氏は夕顔の形見と思つて庇護すまするところがあつたから、今日では古い女房の一人になつて重んぜられもしていた。須磨すまへ源氏の行く時に夫人のほうへ女房を皆移してしまつたから、今では紫夫人の侍女になつてゐるのである。善良なおとなしい女房と夫人も認めて愛していたが、右近の心の中では、夕顔夫人が生きていたなら、明石夫人あかしが愛されているほどには源氏から思われておいでになるであらう、たいした恋でもなかつた女性たちさえ、余さず将来の保証をつけておいでになるような情け深い源氏であるから、紫夫人などの列にははいらないでも、六条院へのわたましの夫人の中にはおいでになるはずであるといつも悲しんでいた。西の京へ別居させてあつた姫君がどうなつたかも右近は知らずにいた。夕顔の死が告げてやりにくい心弱さと、今になつて

相手の自分であつたことは知らせないようにと源氏から言われたことでの遠慮とが、右近のほうから尋ね出すことをさせなかった。そのうちに、乳母めのとの良人おつとが九州の少弐しょうじに任せられたので、一家は九州へ下つた。姫君の四つになる年のことである。乳母たちは母君の行くえを知ろうといろいろの神仏に願を立て、夜昼泣いて恋しがっていたが何のかいもなかった。しかたがない、姫君だけでも夫人の形見に育てていたい、卑しい自分らといつしよに遠国へおつれすることを悲しんでいると父君のほうへほめかしたいとも思ったが、よいつてはなかった。その上母君の所在を自分らが知らずにいては、問われた場合に返辭へんじのしようもない。よく馴染なじんでおいでにならない姫君を、父君へ渡して立つて行くのも、自分らの気がかり千萬なことであろうし、話をお聞きになった以上は、いっしよにつれて行つてもよいと父君が許されるはずがないなどと言ひ出す者もあつて、美しくて、すでにもう高貴な相の備わっている姫君を、普通の旅役人の船に乗せて立つて行く時、その人々は非常に悲しがった。幼い姫君も母君を忘れずに、

「お母様の所へ行くの」

と時々尋ねることが人々の心をより切なくした。涙の絶え間もないほど夕顔夫人を恋しがって娘たちの泣くのを、

「船の旅は縁起を祝って行かなければならないのだから」

とも親たちは小言こごを言った。美しい名所名所を見物する時、

「若々しいお気持ちの方で、お喜びになるでしょうから、こんな景色けしきをお目にかけたい。

けれども奥様がおいになつたら私たちは旅に出てないわけですね」

こんなことを言つて、京ばかりの思われるこの人たちの目には帰って行く波もうらやましかつた。心細くなつている時に、船夫かこたちは荒々しい声で「悲しいものだ、遠くへ来てしまった」という意味の唄うたを唄う声が聞こえてきて、姉きょうだい妹は向かい合つて泣いた。

船人もたれを恋ふるや大島のうら悲しくも声の聞こゆる

来し方ゆくへも行方ゆくへも知らぬ沖に出でてあはれ何処いづこに君を恋ふらん

海の景色を見てはこんな歌も作っていた。金の岬かねみさきを過ぎても「千早振る金の御崎みさきを過ぐれどもわれは忘れずしがのすめ神」という歌のように夕顔夫人を忘れることができずに娘たちは恋しがった。少弐一家は姫君をかしずき立てることだけを幸福に思つて任地で暮らしていた。夢などにたまさか夕顔の君を見ることもあつた。同じような女が横に立ってい

るような夢で、その夢を見たあとではいつもその人が病氣のようになることから、もう死んでおしまいになったのであろうと、悲しいが思うようになった。

少弐は任期が満ちた時に出京しようと思つたが、出京して失職しているより、地方にこのまゝいるほうが生活の楽な点があつて、思いきつて上京することもようしなかつた。その間に当人は重い病氣になつた。少弐は死ぬまぎわにも、もう十歳とおぐらいになつていて、非常に美しい姫君を見て、

「私までもお見捨てすることになれば、どんなに御苦勞をなされることだろう、卑しい田舎なかでお育ちになつてゐることもつたいないことと思つておりましたが、そのうち京へお供して参つて、御肉身のかたがたへお知らせ申し、その先はあなた様の運命に任せるといひたしまして、京は広い所ですから、よいこともきつとあつて、安心がさせていただけると思ひまして、その実行を早く早くとあせるように思つておりましたが、希望の実現どころか、私はもうここで死ぬことになりました」

と悲痛なことを言つていた。三人の男の子に、

「おまえたちは何よりせねばならぬことを、姫君を京へお供することと思へ。私のための仏事などはするに及ばん」

と遺言をした。父君のだれであるかは自身の家の者にも言わずに、ただ大切にする訳のある孫であると言つてあつて、大事にかしずいているうちに、こんなふうでにわかに死んだのであつたから、家族は心細がつて京への出立を急ぐのであるが、この国には故人の少弐に反感を持つていた人が多かつたから、そんな際に報復を受けることが恐ろしくて、今しばらく今しばらくとはばかりつて暮らしている間にも、年月がどんどんたつてしまった。

妙齡になつた姫君の容貌ようぼうは母の夕顔よりも美しかった。父親のほうの筋によるのか、け高い美だかがこの人には備わつていた、性質も貴女きじよらしくおおようであつた。故人の少弐の家に美しい娘のいる噂うわさを聞いて、好色な地方人などが幾いくたり人も結婚を申し込んだり、手紙を送つて来たりする。失敬なことであるとも、とんでもないことであるとも思つて、だれ一人これに好意を持つてやる者はなかつた。

「容貌はまず無難でも、不具なところが身体からだにある孫ですから、結婚はさせずに尼にして自分の生きている間は手もとへ置く」

乳母めのとはこんなことを宣伝的に言つていたのである。

「少弐の孫は片輪かたわだそうだ、惜しいものだ、かわいそうに」

と人が言うのを聞くと、乳母はまた済まない気がして、

「どんなにしても京へおつれしてお父様の殿様にお知らせしよう、まだごく小さい時にも非常におかわいがりになつていたのだから、今になつても決してそまつにはあそばすまい」

と乳母は興奮する。その実現されるように神や仏に願を立てていた。娘たちも息子たちも土地の者と縁組みをして土着せねばならぬように傾いていく。心の中では忘れないが京はいよいよ遠い所になつていった。大人になつた姫君は、自身の運命を悲しんで一年の三度の長精進などもしていた。二十ぐらになるとすべての美が完成されて、まばゆいほどの人になつた。この少弐しょうじ一家のいる所は肥前の国なのである。その辺での豪族などは、少弐の孫の噂うわさを聞いて、今でも絶えず結婚を申し込んでくる、うるさいほどに。

大夫の監げんと言つて肥後に聞こえた豪族があつた。その国ではずいぶん勢いのある男で、強大な武力を持つていのである。そんな田舎武士いなかざむらいの心にも、好色的な風流氣があつて、美人を多く妻妾さいしやうとして集めたい望みを持つていのである。少弐家の姫君のことを大

夫の監は聞きつけて、
「どんな不具なところがあつても、自分はその点を我慢することにして妻にしたい」
と懇切に求婚をしてきた。少弐の人たちは恐ろしく思った。

「どんないい縁談にも彼女は耳をかさないで尼になろうとしています」

と中に立った人から断わらせた。それを聞くと監は不安がって、自身で肥前へ出て来た。少弐家の息子たちを監は旅宿へ呼んで姫君との縁組みに助力を求めるのであった。

「成功すれば、両家は力になり合つて、あなたがたに武力の後援を惜しむのですか」
などと言つてくれる監げんに二人の息子だけは好意を持ちだした。

「私たちが初めは不似合いな求婚者だ、お気の毒だと姫君のことを思つてましたが、考えてみると、自分たちの後ろ立てにするのには最も都合のいい有力な男ですから、この人に敵対をされては肥前あたりで何をすることも不可能だということがわかってきました。貴族の姫君だと言つても、父君が打つちやつてお置きになるし、世間からも認められていないではしかたがありません。こんなに熱心になっている監と結婚のできるのはかえって幸福だと思えますよ。この宿命のあるために九州などへ姫君がおいでになることにもなったのでしょうか。逃げ隠れをなすつても何になるものですか。負けてなんかいませんからね、監は。常識で考えられる以上の無茶なことでも監はしますよ」

と兄弟は家族をおどすのである。長兄の豊後介ぶんごのすけだけは監の味方でなかった。

「もつたいないことだ。少弐の御遺言があるのだから、自分はどうしてもこの際姫君を京

へお供しましょう」

と母や妹に言う。女たちも皆泣いて心配していた。母君がどうおなりになったか知れないようなことになって、せめて姫君を人並みな幸福な方にしないではと、自分らは念じているのに、田舎武士いなかざむらいなどに嫁がせておしまいすることなどは堪えうることでないと思っていることも知らずに、自身の力を過信している監は、手紙を書いて送ってきたりするものである。字などもちよつときれいで、唐紙とうしに香の薫かおりの染しませたのに書いて来る手紙も、文章も物になつてはいなかった。また自身も親しくなつた少貳家の次男とつれ立つて訪ねて来た。年は三十くらいの男で、背が高くて、ものものしく肥っている。きたなくは思われないが、いろいろ先入主になつていることがあつて、見た感じがうとましい。荒々しい様子は見ただけでも恐ろしい気がした。血色がよくて快活ではあるが、涸れ声かで語り散らす。求婚者は夜に訪問するものになつてゐるが、これは風変わりな春の夕方のことであつた。秋ではないが怪しい気持ち（何時いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけり）になつたのかもしれない。機嫌きげんをそこねまいとして未亡人のおとどが出て応接した。「お亡かくれになつた少貳は人情味のたつぷりとあるりっぱなお役人でしたからぜひ御懇親をお願いしたいと思いますながら、こちらの尊敬心をお見せできなかつたうちにお気の毒に死んでお

しまいになったから、そのかわりに御遺族へ敬意を表しようと思って、奮発して、一所懸命になって、しいて参りました。こちらにおいでになる姫君が御身分のいいことを私は聞いていて、尊敬申しますが、妻になつていただきたいのだ。我輩^{わがはい}は一家の御主人と思つて頭の上へ載せんばかりにしてですね、大事にいたしますよ。あなたがこの縁組みにあまり御賛成にならないというのは、私がこれまで幾^{いくたり}人もものつまらない女と関係してきたことで、いやがられているのではありませんか。たとえそんな女どもが私についているとしても、そいつらに姫君といつしよの扱いなどをするものですか。我輩^{きやくわい}は姫君を^{きやくわい}後の位から落とすつもりはない」

などと勝手なことを監^{げん}は言い続けた。

「いえ、不賛成などと、そんなことはありません。非常に結構なお話だと私は思っているのですがね。何という不運なのでしょう、あの人は並み並みに一人前の女に成り切っていないところがありましてね、自分は結婚のできない身体^{からだ}だとあきらめています、かわいそうでも、私どもの力ではどうにもならないのでございます」

と、おとどは言つた。

「決して遠慮をなさるには及びませんよ。どんな盲目^{めくら}でも、いざりでも私は護^{まも}つていつて

あげます。我輩わがはいが人並みの身体に直してあげますよ。肥後一国の神仏は我輩の意志どおりに何事も加勢してくれますからね」

などと監げんは誇っていた。結婚の日よりも何日ごろというようなことを監が言うと、おとどのほうでは、今月は春の季の終わりで結婚によりしくないというような田舎めいた口実で断わる。縁側から下りて行く時になって、監は歌を作って見せたくなった。やや長く考えてから言い出す。

「君にもし心たがはば松浦まつらなるかがみの神をかけて誓はん

この和歌は我輩の偽らない感情がうまく表現できたと思います」

と監は笑顔えがおを見せた。おとどはすべてのことが調子はずれな田舎武士に、返歌などをする気にはなれないのであったが、娘たちに歌を詠めよと言うと、

「私など、お母さんだつてそうでしょう。自失ていしている体よ」

こう言つて聞かない。おとどは興味のない返歌をやつと出まかせふうに言つた。

年を経て祈る心のたがひなばかがみの神をつらしとや見ん

先刻からの気味悪さにおとどは慄え声になっていた。

「お待ちなさい。そのお返事の内容だが」

監^{げん}がのつそりと寄つて来て、腑^ふに落ちぬという顔をするのを見て、おとどは真^ま青^{っさお}になつてしまった。娘たちはあんなに言つていたものの、こうなつては氣強く笑つて出て行つた。

「それはね、お嬢様が世間並みの方でないことから、母がこの御縁の成立した時に、恨めしくお思いにならないかということ、もうぼけております母が神様のお名などを入れて、変^よに詠^よんだだけの歌ですよ」

とこじつけて聞かせた。正解したところで求婚者へのお愛^{あい}想^そ歌なのであるが、

「ああもつとも、もつとも」

とうなずいて、監は、

「技巧が達者なものです。我輩は田舎者ではあるが賤民じゃないのです。京の人でもたいたものでないことを我輩は知っている。輕^{けい}蔑^{いべつ}してはいけませんよ」

と言つたが、もう一首歌を作ろうとして、できなかったのかそのまま帰って行つた。次郎がすっかりあちらがたになつてゐるのを家族は憎みながらも、豊後介の助けを求めることが急であつた。どうして姫君にお尽くしすればよいか、相談相手はなし、親身の兄弟までが監に反対すると言つて、異端者扱いにして自分と絶交する始末である。監の敵になつてはこの地方で何一つ仕事はできないだろう、手出しをしてかえつて自分から不幸を招きはしまいかと豊後介は煩悶はんもんをしたのであるが、姫君が口では何事も言わずにこのことで悲しんでいる様子を見ると、氣の毒で、そうなれば死のうと決心している様子が道理に思われ、豊後介は苦しい策をして姫君の上京を助けることにした。妹たちも馴染なじんだ良人おとこを捨てて姫君について行くことになつた。あてきと言つて、夕顔夫人の使つていた童女は兵部ようぶの君という女房になつていて、この女たちが付き添つて、夜に家を出て船に乗つた。大夫たゆうの監げんはいったん肥後へ歸つて四月二十日ごろに吉日を選んで新婦を迎えに来ようとしてゐるうちに、こうして肥前を脱出するのである。姉は子供もおおぜいになつていて同行ができないのである。行く人、残る人が名残なごりを惜しんで、また見る機会おきのないことを悲しむのであつたが、行く人にとっては長い年月をここで送つたのではあつても、見捨てがたいほど心の残るものは何もこの土地になかつた。ただ松浦の宮の前の海岸の風光と姉娘と

別れることだけがだれにもつらかった。顧みもされた。

浮島^{うきしま}を漕ぎ離れても行く方やいづくとまりと知らずもあるかな

行くさきも見えぬ波路に船出して風に任する身こそ浮きたれ

初めのは兵部の作で、あとは姫君の歌である。心細くて姫君は船でうつ伏しになっていた。こうして逃げ出したことが肥後に知れたなら、負けぎらいな監は追って来るであろうと思われるのが恐ろしくて、この船は早船といって、普通以上の速力が出るように仕かけてある船であつたから、ちようど追い風も得て危ういほどにも早く京をさして走つた。響^{ひびき}の灘も無事に過ぎた。海上生活二、三日のちである。

「海賊の船なんだろうか、小さい船が飛ぶように走って来る」
などと言う者がある。惨酷^{さんこく}な海賊よりも少弐^{しょうに}の遺族は大夫^{たゆう}の監^{げん}をもつと恐れていて、その追つ手ではないかと胸を冷やした。

憂^うきことに胸のみ騒ぐひびきには響の灘も名のみなりけり

と姫君は口ずさんでいた。川尻かわじりが近づいたと聞いた時に船中の人ははじめてほっとした。例の船子かこは「唐泊からどまりより川尻押すほどは」と唄うたっていた。荒々しい彼らの声も身に沁しんだ。豊後介ぶんごのすけはしみじみする声で、愛する妻子も忘れて来たと歌われているとき、その歌のとおりにも自分も皆捨てて来た、どうなるであろう、力になるような郎党は皆自分がつれて来てしまった。自分に対する憎悪ぞうおの念から大夫の監は彼らに復讐をしないであろうか、その点を考えないで幼稚な考えで、脱出して来たと、こんなことが思われて、気の弱くなつた豊後介は泣いた。「胡地妻こちのさい子虚棄損しをむなしくすつ」とこう兄の歌っている声を聞いて兵部も悲しんだ。自分のしていることは何事であろう、愛してくれる男ににわかにそむいて出て来たことをどう思っているであろうと、こんなことが思われたのである。京へはいつても自分らは帰って行く邸やしきなどはない、知人の所といつても、たよって行つてよいほど頼もしい家もない、ただ一人の姫君のために生活の根柢のできていた土地を離れて、空想の世界へ踏み入ろうとする者であると豊後介は考えさせられた。姫君をもどうするつもりであるのであろうと自身であきれながらも今さらしかたがなくてそのまま一行は京へはいった。九条に昔知っていた人の残っていたのを捜し出して、九州の人たちは足どまりにした。こ

こは京の中ではあるがはかばかしい人の住んでいる所でもない町である。外で働く女や商人の多い町の中で、悲しい心を抱いて暮らしていたが、秋になるといつそう物事が身に沁しみんで思われて過去からも、未来からも暗い影ばかりが投げられる気がした。信頼てつるされている豊後介も、京では水鳥が陸へ上がったようなもので、職を求める手蔓てづるも知らないのであった。今さら肥前へ帰るのも恥ずかしくてできないことであつた。思慮の足りなかつたことを豊後介は後悔するばかりであるが、つれて来た郎党も何かの口実を作つて一人去り二人去り、九州へ逃げて帰る者ばかりであつた。無力な失職者になつてゐる長男に同情したようなことを母のおとどが言ふと、

「私などのことは何でもありません。姫君を護まもつてゐることができれば、自分の郎党などは一人もなくなくてもいいのですよ。どんなに自分らが強力な豪族になつたつても、姫君をああした野蛮な連中に取られてしまえば、精神的に死んでしまったのも同然ですよ」

と豊後介は慰めるのであつた。

「神仏のお力にすがればきつと望みの所へ導いてくださるでしょうから、お詣まいりをなさるがいいと思います。ここから近い八幡やわたの宮は九州の松浦、箱崎はこしきと同じ神様なのですから、あちらをお立ちになる時、お立てになつた願もありますから、神の庇護で無事に帰京しま

したというお礼参りをなさいませ」

と豊後介は言つて、姫君に八幡詣りやわたまいをさせた。八幡のことにくわしい人に聞いておいで、御師おしという者の中に、昔親の少弐が知つていた僧の残つてゐるのを呼び寄せて、案内をさせたのである。

「このつぎには、仏様の中で長谷はせの観音様は靈験のいちじるしいものがあると支那しなにまで聞こえてゐるそうですから、お参りになれば、遠国にいて長く苦勞をなすつた姫君をきつとお憐みあわれになつてよいことがあるでしょう」

また豊後介は姫君に長谷詣はせもうでを勧めて実行させた。船や車を用いずに徒歩で行くことにさせたのである。かつて経験しない長い路みちを歩くことは姫君に苦しかったが、人が勧めるとおりにして、つらさを忍んで夢中で歩いて行つた。自分は前生にどんな重い罪障があつてこの苦しみに堪えねばならないのであらう、母君はもう死んでおいでになるにしても、自分を愛してくださるならその国へ自分をつれて行つてほしい。しかしまだ生きておいでになるのならお顔の見られるようにしていただきたいと姫君は観音を念じていた。姫君は母の顔を覚えていなかった。ただ漠然ばくぜんと親というものの面影を今日まで心きように作つて來てゐるだけであつたが、こうした苦難に身を置いては、いっそう親というものの恋しさが切

実に感ぜられるのであった。ようやく椿市つばいちという所へ、京を出て四日めの昼前に、生きている気もしないで着いた。姫君は歩行らしい歩行もできずに、しかもいろいろな方法で足を運ばせて来たが、もう足の裏が腫はれて動かせない状態になつて椿市で休息をしたのである。頼みにされている豊後介と、弓矢を持った郎党が二人、そのほかは僕しもべと子供侍が三、四人、姫君の付き添いの女房は全部で三人、これは髪の上から上着を着た壺装束つぼしょうぞくをしていた。それから下女が二人、これが一行で、派手はでな長谷詣りの一行ではなかった。寺へ燈明料を納めたりすることをここで頼んだりしているうちに日暮れ時になった。この家の主人あるじである僧が向こうで言っている。

「私には今夜泊めようと思つているお客があつたのだのに、だれを勝手に泊めてしまったのだ、物知らずの女どもめ、相談なしに何をしたのだ」

怒おこつていのである。九州の一行は残念な気持ちでこれを聞いていたが、僧の言つたとおりに参加者の一団が町へはいつて来た。これも徒歩で来たものらしい。主人らしいのは二人の女で召使の男女の数は多かつた。馬も四、五匹引かせている。目だたぬようにしているが、きれいな顔をした侍などもついていた。主人の僧は先客があつてもその上にどうかしてこの連中を泊めようとして、道に出て頭を掻かきながら、ひよこひよこと追ついしやう従ようを

していた。かわいそうな気はしたが、また宿を変えるのも見苦しいことであるし、面倒でもあったから、ある人々は奥のほうへはいり、残りの人々はまた見えない部屋へやのほうへやったりなどして、姫君と女房たちとだけはもとの部屋の片すみのほうへ寄って、幕のようなもので座敷の仕切りをして済ませていた。あとの客も無作法な人たちではなかった。遠慮深く静かで、双方ともつましい相い客になっていた。このあとから来た女というのは、姫君を片時も忘れずに恋しがっている右近であった。年月がたつにしたがって、いつまでも続いている女房勤めも気がさすように思われて、煩悶はんもんのある心の慰めに、この寺へたびたび詣まゐっているのである。長い間の経験で徒歩の旅を大儀とも何とも思っているのではなかったが、さすがに足はくたびれて横になっていた。こちらの豊後介は幕の所へ来て、食事なのであろう、自身で折敷おしきを持って言っていた。

「これを姫君に差し上げてください。膳ぜんや食器なども寄せ集めのもので、まったく失礼なのです」

右近はこれを聞いていて、隣にいる人は自分らの階級の人ではないらしいと思った。幕の所へ寄ってのぞいて見たが、その男の顔に見覚えのある気がした。だれであるかはまだわからない。豊後介のごく若い時を知っている右近は、肥えて、そうして色も黒くなって

いる人を今見て、直ぐには思い出せないのである。

「三条、お召しですよ」

と呼ばれて出て来る女を見ると、それも昔見た人であつた。昔の夕顔夫人に、下の女房ではあつたが、長く使われていて、あの五条の隠れ家にまでも来ていた女であることがわかつた右近は、夢のような気がした。主人である人の顔を見たく思つても、それはのぞいて見られるようなふうにはしていなかつた。思案の末に右近は三条に聞いてみよう、兵ひょう藤太とうだと昔言われた人もこの男であろう、姫君がここにおいでになるのであらうかと思う

と、気が急いで、そしてまた不安でならないのであつた。幕の所から三条を呼ばせたが、熱心に食事をしている女はすぐに出て来ないのを右近は憎くさえ思つたが、それは勝手すぎた話である。やつと出て来た。

「どうもわかりません。九州に二十年も行つておりまして卑しい私どもを知つておいでになるとおつしやる京のお方様、お人違いではありませんか」

と言う。田舎風いなかに真赤まっかな搔練かいねりを下に着て、これも身体からだは太くなつていた。それを見ても自身の年が思われて、右近は恥ずかしかつた。

「もつと近くへ寄つて私を見てごらん。私の顔に見覚えがありますか」

と言つて、右近は顔をそのほうへ向けた。三条は手を打つて言った。

「まああなたでいらつしやいましたね。うれしいつて、うれしいつて、こんなこと。まああなたはどちらからお参りになりました。奥様はいらつしやいますか」

三条は大声をあげて泣き出した。昔は若い三条であつたことを思い出すと、このなりふりにかまわぬ女になつてゐることが右近の心を物哀れにした。

「おとさんはいらつしやいますか。姫君はどうおなりになりました。あてきと言つた人は」

と、右近はたたみかけて聞いた。夫人のことは失望をさせるのがつらくてまだ口に出せないのである。

「皆、いらつしやいます。姫君も大人おとなになつておいでになります。何よりおとどさんにこの話を」

と、言つて三条は向こうへ行つた。九州から来た人たちの驚いたことは言うまでもない。「夢のような気がします。どれほど恨んだかしのれない方にお目にかかることになりました」おとどはこう言つて幕の所へ来た。もうあちらからも、こちらからも隔てにしてあつた屏風びょうぶなどは取り払つてしまつた。右近もおとども最初はものが言えずに泣き合つた。や

つとおとどが口を開いて、

「奥様はどうおなりになりました。長い年月の間夢にでもいらつしやる所を見たいと大願を立てましたがね、私たちは遠い田舎の人になっていたのですからね、何の御様子も知ることができません。悲しんで、悲しんで、長生きすることが恨めしくてならなかったのですが、奥様が捨ててお行きになった姫君のおかわいお顔を拝見しては、このまま死んでは後世の障りになると思ひましてね、今でもお護りしています」

おとどの話し続ける心持ちを思つては、昔あの際に気おくれがして知らせられなかったよりも、幾倍かのつらさを味わいながらも、絶体絶命のようになって、右近は、

「お話ししてもかいのないことでございますよ。奥様はもう早くお亡れになったのですよ」と言つた。三条も混ぜて三人はそれから咽せ返つて泣いていた。

日が暮れたと騒ぎ出し、お籠りをする人々の燈明が上げられたと宿の者が言つて、寺へ出かけることを早くと急がせに來た。そのために双方ともまだ飽き足らぬ気持ちで別れねばならなかった。

「ごいっしょにお詣りをしましょうか」

とも言つたが、双方とも供の者の不思議に思うことを避けて、おとどのほうではまだ豊

後介にも事実を話す間がないままで同時に宿坊を出た。右近は人知れず九州の一行の中の姫君の姿を目に探っていた。そのうちに美しい後ろ姿をした一人の、非常に疲労した様子で、夏の初めの薄絹の単衣ひとえのような物を上から着て、隠された髪かみの透き影のみごとそうな人を右近は見つけた。お気の毒であるとも、悲しいことであるとも思つてながめたのである。少し歩き馴れた人は皆らくらくと上の御堂みどうへ着いたが、九州の一行は姫君を介抱かいほうしながら坂を上るので、初夜の勤めの始まるころにようやく御堂へ着いた。御堂の中は非常に混雑していた。右近が取らせてあつたお籠り部屋こもべやは右側の仏前に近い所であつた。九州の人の頼んでおいた僧は無勢力なのか西のほうの間で、仏前に遠かつた。

「やはりこちらへおいでなさいませ」

と言つて、右近が召使をよこしたので、男たちだけをそのほうに残して、おとどは右近との邂逅かいこうを簡単に豊後介へ語つてから、右近の部屋のほうへ姫君を移した。

「私などつまらない女ですが、ただ今の太政大臣様にお仕えしておりますのでね、こんな所に出かけていまして不都合はだれもしないであろうと安心していられるのですよ。地方の人らしく見ますと、生意氣にお寺の人などは軽蔑けいべつした扱いをしますから、姫君にもつたいなくて」

右近はくわしい話もしたのであるが、仏前の経声の大きいのに妨げられて、やむをえず仏を拜んでだけいた。

この方をお捜しくださいませ、お逢^あわせくださいませとお願いしておりましたことをおこなえくさいましたから、今度は源氏^{おとし}の大臣^{おとし}がこの方の子にしてお世話をなさりたいと熱心に思^{おぼしめ}召^めすことが実現されますようにお計らいくださいませ、そうしてこの方が幸福におなりになりますように。

と祈っているのであった。国々の参詣^{さんけい}者が多かった。大和守^{やまとのかみ}の妻も来た。その派手^{はで}な参詣^{さんけい}ぶりをうらやんで、三条は仏に祈っていた。

「大慈大悲の観音様、ほかのお願いはいっさいいたしません。姫君を大弔^{だいに}の奥様でなければ、この大和の長官の夫人にしていたきたいと思います。それが事実になりました、私どもにも幸福が分けていただけました時に厚くお礼をいたします」

額に手を当てて念じているのである。右近はつまらぬことを言うのにがにがしく思った。「あなたはとんでもないほど田舎者になりましたね。中将様は昔だつてどうだつたでしょう、まして今では天下の政治をお預かりになる大臣^{おとし}ですよ。そうしたお盛んなお家の方で姫君だけを地方官の奥さんという二段も三段も低いものにしてそれでいいのですか」

と言うと、

「まあお待ちなさいよあなた。大臣様だつて何だつてだめですよ。大式のお館やかたの奥様が清きよ水よみずの観世音寺へお参りになった時の御様子をご存じですか、帝様の行幸みかじがあれ以上みゆきのものとは思えません。あなたは思い切ったひどいことをお言いになりますね」

こう言つて、三条はなお祈りの合掌を解こうとはしなかった。九州の人たちは三日参さんろ籠ろうすることにしていた。右近はそれほど長くいようとは思つていなかったが、この機おり会かいに昔の話も人々としたく思つて、寺のほうへ三日間参籠すると言わせるために僧を呼んだ。雑用をする僧は願文がんもんのことなどもよく心得ていて、すばやくいろいろのことを済ませていく。

「いつもの藤原瑠璃君ふじわらのるりぎみという方のためにお経をあげてよくお祈りすると書いてください。その方にね、近ごろお目にかかることができましたからね。その願果たしもさせていただきます」

と右近の命じていることも九州の人々を感動させた。

「それは結構なことでしたね。よくこちらでお祈りしているせいでしょう」
などとその僧は言つていた。御堂の騒ぎは夜通し続いていた。

夜が明けたので右近は知った僧の坊へ姫君を伴って行つた。静かに話したいと思うからであろう。質素なふうで来ているのを恥ずかしがっている姫君を右近は美しいと思つた。

「私は思いがけない大きなお邸やしきへお勤めすることになりました、たくさん女の方を見ましたが、殿様の奥様の御容貌ごきりように比べてよいほどの方はないと長い間思っていました。それにお小さいお姫様がまたお美しいことはもつともなことですが、そのお姫様はまたどんなに大事がられていらつしやるか、まったく幸福そのもののような方ですがね、こうして御質素なふうをなすつていらつしやる姫君を、私は拝見して、その奥様や二条院のお姫様に姫君が劣つていらつしやるように思われませんのでうれしゅうございます。殿様はおつしやいますのですよ、自分の父君の帝様みかじの時から宮中の女御やお后きさき、それから以下の女性は無数に見ているが、ただ今の帝様のお母様のお后の御美貌と自分の娘の顔とが最もすぐれたもので、美人とはこれと言うのであると思われるつて。私は拝見していて、そのお后様は存じませんけれど、お姫様はまだ小さくて将来は必ずすぐれた美人におなりになるでしょうが、奥様の御美貌に並ぶ人はないと思うのですよ。殿様も奥様のお美しさの価値を十分ご存じでいらつしやるでしょうが、御自分のお口から最上の美人の数へお入れにはなりにくいのですよ。こんなこともお言いになることがあるのですよ、あなたは私と夫婦

になれたりしてもつたいたく思いませんかなどと戯談じょうだんをね。お二人のそろいもそろつたお美しさを拝見しているだけで命も延びる気がするのですよ。あんな方があるものでもありません、私がそんなに思う六条院の奥様にどこ一つ姫君は劣っていらつしやいません。物は限りがあつてすぐれた美貌と申しても円光を後ろに負っていらつしやるわけではありませんけれど、これがほんとうに美しいお顔と申し上げていいのでございましょう」

右近は微笑ほほえんで姫君をながめていた。少弐しょうにの未亡人もうれしそうである。

「こんなすぐれたお生まれつきの方を、もう一步で暗い世界へお沈めしてしまうところでしたよ。惜しくてもつたいたくなくて、家も財産も捨てて頼りたよにしてよい息子むすこにも娘にも別れて、今ではかえって知らぬ他国のような心細い氣のする京へ帰って来たのですよ。あなた、どうぞいい智慧ちえを出してくださいって、姫君の御運を開いてあげてくださいまし。貴族のお家に仕えておいでになる方は、便宜がたくさんあるでしょう。お父様の大臣が姫君をお認めくださいますように計らってくださいまし」

とおとどは言うのであった。姫君は恥ずかしく思つて後ろを向いていた。

「それがね、私はつまらない者ですけれど、殿様がおそばで使っていてくださいますからね、昔のいろいろな話を申し上げる中で、どうなさいましたらうと私が姫君のことをよく

申すものですから、殿様が、ぜひ自分の所へ引き取りたく思う。居所を聞き込んだら知らせるがいいとおっしゃるのですよ」

「源氏の大臣様はどんなにおりっぱな方でも、今のお話のようなよい奥様や、そのほかの奥様も幾人かいらつしやるのでしょうか。それよりもほんとうのお父様の大臣へお知らせする方法を考えてください」

とおとどが言うのを聞いて、右近ははじめて夕顔夫人を愛して、死の床に泣いた人の源氏であつたことを話した。

「どうしてもお亡れになつた奥様を忘れられなく思召してね。奥様の形見だと思つて姫君のお世話をしたい、自分は子供も少なくて物足りないのだから、その人が捜し出せたなら、自分の子を家へ迎えたように世間へは知らせておこうと、それはずっと以前からそうおっしゃるのですよ。私の幼稚な心弱さから、奥様のお亡くなりになりましたことをあなたがたにお知らせすることができないでおりますうちに、御主人が少式におなりになつたでしょう。それはお名を聞いて知つたのですよ。お暇乞いに殿様の所へおいでになりましたのを、私はちらとお見かけしましたが、何をお尋ねすることもできないじまいになつたのですよ。それでもまだ姫君をあゝの五条の夕顔の花の咲いた家へお置きになつて赴任を

なさるのだと思つていました。まあどうでしょう、もう一步で九州の人になっておしまいになるところでございましたね」

などと人々は終日昔の話をしたり、いつしよに念誦ねんずを行なったりしていた。御堂へ参詣する人々を下に見おろすことのできる僧坊であつた。前を流れて行くのが初瀬川である。右近は、

「二もとの杉すぎのたちどを尋ねずば布留川ふるのべに君を見ましや

ここでうれしい逢瀬おうせが得られたと申すものでございます」
と姫君に言つた。

初瀬川はやくのことは知らねども今日けふの逢瀬に身さへ流れぬ

と言つて泣いている姫君はきわめて感じのよい女性であつた。これだけの美貌びぼうが備わつていても、田舎風いなかのやばな様子が添つていたなら、どんなにそれを玉の瑕きずだと惜しまれる

ことであろう、よくもこれほどりっぱな貴女にお育ちになったものであると、右近は少弐未亡人に感謝したい心になった。母の夕顔夫人はただ若々しくおおような柔らかい感じの豊かな女性というにすぎなかった。これは容姿に気高けだかさのあるすぐれた姫君と見えるのであった。右近はこれによつて九州という所がよい所であるように思われたが、また昔の朋ほ輩うばいが皆不恰ぶかつこう好な女になっているのであったから不思議でならなかった。日が暮れると御堂に行き、翌日はまた坊に歸つて念誦ねんずに時を過へごした。秋風が溪たにの底から吹き上がつて来て肌寒はださむさの覚えられる所であつたから、物寂しい人たちの心はまして悲しかった。姫君は右近の話から、人並みの運も持たないように悲觀をしていた自分も、父の家の繁栄と、低い身分の人を母として生まれた子供たちさえも皆愛されて幸福になつてゐることがわかつた上は、もう救われる時に達したのであるかもしれないという氣になつた。歸る時は双方でよく宿所を尋ね合つて、またわからなくなつてはと互いに十分の警戒をしながら別れた。右近の自宅も六条院に近い所であつたから、九州の人の宿とも遠くないことを知つて、その人たちは力づけられた氣がした。

右近は旅からすぐに六条院へ出仕した。姫君の話をする機会を早く得たいと思う心から急いのである。門をはいるとすでにすべての空氣に特別な豪華な家であることが感ぜら

れるのが六条院である。来る車、出て行く車が無数に目につく。自分などがこの家の一人の女房として自由に出入りをすることもまばゆい氣のすることであると右近に思われた。その晩は主人夫婦の前へは出ずに、部屋へ引きこもって右近はまた物思いをした。翌日は昨日自宅から上がって来た高級の女房が幾人もある中から、特に右近が夫人に呼び出されたのを、右近は誇らしく思った。源氏も夫人の居間にいた。

「どうして長く家へ行っていたのかね。少しこれまでとは違っているのではないか。独身者はこんな所にいる時と違って、自宅では若返ることもできるのだろう。おもしろいことがきつとあつたらう」

などと例の困らせる氣の戯談じょうだんを源氏が言う。

「ちようど七日お暇いしまをいただいでいたのでございますが、おもしろいことなどはなかなかないのでございます。山へ参りましてね。お氣の毒な方を発見いたしました」

「だれ」

と源氏は尋ねた。突然その話をするのも、これまで夫人にしていな昔の話から筋を引いていることを、源氏にだけ言えば夫人があとで話をお聞きになって不快がられないかなどと右近は迷っていて、

「まったくわしくお話を申し上げます」

と言つて、ほかの女房たちも来たのでそのまま言いさしにした。

灯^ひなどをももさせてくつろいでいる源氏夫婦は美しかった。女王^{によう}は二十七、八になつ

た。盛りの美があるのである。このわずかな時日のうちにも美が新しく加わったかと右近の目に見えるのであった。姫君を美しいと思つて、夫人に劣っていないと見たものの思いなしか、やはり一段上の美が夫人にはあるようで幸福な人と不運な人とはこれだけの相違があるものらしいなどと右近は思つた。寢室^{あし}にはいつてから、脚^なを撫でさせるために源氏は右近を呼んだ。

「若い人はいやな役だと迷惑がるからね。やはり昔馴染^{なじみ}の者は氣心が双方でわかつていてどんなことでもしてもらえるよ」

と源氏が言っているのを聞いて、若い女房たちは笑っていた。

「そうですよ。どんなことでもさせていただいて私たちは結構なんですけれど、あの御^ご戲談^{うた}に困るだけね」

などと言っているのであった。

「奥さんも昔馴染^{きげん}どうしがあまり仲よくしては機嫌^{きげん}を悪くなさらない。決して寛大な方で

はないから危いね」
あぶな

などと言つて源氏は笑つていた。愛嬌あいきようがあつて常よりもまた美しく思われた。このごろは公職が閑散なほうに變つてしまつて、自宅でものんきに女房などにも戯談を言いかけて相手をためすことなどを楽しむ源氏であつたから、右近のような古女ふるおんなにも戯れてみせるのである。

「発見したつて、どんな人かね。えらい修験者しゆげんじやなどと懇意になつてつれて来たのか」と源氏は言つた。

「ひどいことをおつしやいます。あの薄命な夕顔のゆかりの方を見つけましたのでございます」

「そう、それは哀れな話だね、これまでどこにいたの」

と源氏に尋ねられたが、ありのままには言いにくくて、

「寂しい郊外に住んでおいでになつたのでございます。昔の女房も半分ほどはお付きしていましてございますから、以前の話もいたしまして悲しゅうございました」

と右近は言つていた。

「もうわかつたよ。あの事情を知つていらつしやらない方がいられるのだからね」

と源氏が隠すように言うと、

「私がおじやまなの、私は眠くて何のお話だかわからないのに」

と女によう王は袖そでで耳をふさいだ。

「どんな容貌きりよう、昔の夕顔に劣っていない」

「あんなにはおなりにならないかと存じておりましたけれど、とてもおきれいにおなりになつたようでございます」

「それはいいね、だれぐらい、この人とはどう」

「どういたしまして、そんなには」

と右近が言うと、

「得意なようで恥ずかしい。何にせよ私に似ていれば安心だよ」

わざと親らしく源氏は言うのであった。

その話を聞いた時から源氏はおりおり右近一人だけを呼び出して姫君の問題について語り合つた。

「私はあの人を六条院へ迎えることにするよ。これまでも何かの場合によく私は、あの人の行くえを失ってしまったことを思つて暗い心になつていたのだからね。聞き出せばすぐ

にその運びにしなければならぬのを、怠っていることでも済まない気がする。お父さんの大臣に認めてもらう必要などはないよ。おおぜいの子供に大騒ぎをしていられるのだからね。たいした母から生まれたのでもない人がその中へはいって行つては、結局また苦勞をさせることになる。私のほうは子供の数が少ないのだから、思いがけぬ所で発見した娘だとも世間へは言つておいて、貴公子たちが恋の対象にするほどにも私はかしくいてみせる」

源氏の言葉を聞いていて、右近は姫君の運がこうして開かれて行きそうであるとうれしかった。

「何も皆思おぼしめ召し次第でございます。内大臣へお知らせいたしますのも、あなた様のお手でなくてはできないことでございます。不幸なお亡なくなり方をなさいました奥様のかわりにもともかくも助けておあげになりましたなら罪がお軽くなります」

と右近が言うと、

「私をまだそんなふうにも責めるのだね」

源氏は微笑ほほえみながらも涙ぐんでいた。

「短いばかり縁だったと、私はいつもあの人のことを思っている。この家に集まって来

ている奥さんたちもね、あの時にあの人を思ったほどの愛を感じた相手でもなかったのが、皆あの人のように短命でないことだけで、私の忘れっぽい男でないのを見届けているのが多いのに、あの人の形見にはただ右近だけを世話していることが残念な氣のすることは始終だったのに、そうして姫君を私の手もとへ引き取ることができればうれしいだろう」

こう言つて、源氏は姫君へ最初の手紙を書いた。あの末摘花すえつむはなに幻滅を感じたことの忘れられない源氏は、そんなふう逆境に育つた麗人の娘、大臣の実子も必ずしも期待にそむかないとは思われない不安さから手紙の返事の書きようでまずその人を判断しようとしたのである。まじめにこまごまと書いた奥には、

こんなに私があなたのことを心配していますことは、

知らずとも尋ねて知らん三島江おに生みふる三稜みくりのすぢは絶えじな

とも書いた。右近はこの手紙を自身で持つて行つて、源氏の意向を説明した。姫君用の衣服、女房たちの服の材料などがたくさん贈られた。源氏は夫人とも相談したものらしく、衣服係の所にできていた物も皆取り寄せて、色の調子、重ねの取り合わせの特にすぐれた

物を選んで贈ったのであったから、九州の田舎^{いなか}に長くいた人々の目に珍しくまばゆい物と映ったのはもつともなことである。姫君自身は、こんなに品々でなくても、実父の手から少しの贈り物でも得られたのならうれしいであろうが、知らない人と交渉を始めようなどとは意外であるというように、それとなく言つて、贈り物を受けることを苦しく思うふうであつたが、右近は母君と源氏との間に結ばれた深い因縁を姫君に言つて聞かせた。人々も横から取りなした。

「そして源氏の大臣の御厚意でごりっぱにさえおなりになりましたなら、内大臣様のほうからもごく自然に認めていただくことができます。親子の縁と申すものは絶えたようでも絶えないものでございます。右近でさえお目にかかりたいと一心に祈っていました結果はどうでございます。神仏の導きがあつたではございませんか。御双方ともお身体^{からだ}さえお丈夫でいらつしやればきつとお逢^あいになれる時がまいります」

とも慰めるのである。まず早く返事と言つて皆がかりで姫君を責めて書かせるのであつた。自分はどうすつかり田舎者なのだからと姫君は書くのを恥ずかしく思うふうであつた。用箋^{ようせん}は薫物^{たきもの}の香を沁^しませた唐紙^{とうし}である。

数ならぬみくりや何のすぢなればうきにしもかく根をとどめけん

とほのかに書いた。字ははかない、力のないようにも見えるものであったが、品がよくて感じの悪くないのを見て源氏は安心した。姫君を住ます所をどこにしようかと源氏は考えたが、南の一廓はあいた御殿もない。華奢かしやな生活のここが中心になっている所であるから、人出入りもあまりに多くて若い女性には気の毒である。中宮のお住居すまいになっている一廓の中には、そうした人にふさわしい静かな御殿もあいているが、中宮の女房になったように世間へ聞かれてもよろしくないと源氏は思つて、少しじみな所ではあるが東北の花散里はなちりの住居の中の西の対は図書室になっているのを、書物をほかへ移してそこへ住ませようという考えになった。近くにいる人も氣だての優しい、おとなしい人であるから、花散里と親しくして暮らすのもいいであろうと思つたのである。こうなってから夫人にも昔の夕顔の話を源氏はしたのであつた。そうした秘密があつたことを知つて夫人は恨んだ。

「困るね。生きている人のことでは私のほうから進んで聞いておいてもらわねばならないこともありますかね。たとえこんな時にでも昔のそうした思い出を話すのはあなたが特別な人だからですよ」

こう言っている源氏には故人を思う情に堪えられない様子が見えた。

「自分の経験ばかりではありませんがね、他人のことでもよく見ましたがね、女というものはそれほど愛し合っている仲でなくてもずいぶん嫉妬しつとをするもので、それに煩わされている人が多いから、自分は恐ろしくて、好色な生活はすまいと念がけながらも、そのうち自然に放縱ほうしようにもなって、幾人いくたりもの恋人を持ちましたが、その中で可憐かれんで可憐でならなく思われた女としてその人が思い出される。生きていたなら私は北の町にいる人と同じくらいには必ず愛しているでしょう。だれも同じ型の人はないものですが、その人は才女らしい、りっぱなというような点は欠けていたが、上品でかわいかった」

などと源氏が言うのと、

「でも、明石あかしの波にくらべるほどにはどうだか」

と夫人は言った。今も北の御殿の人を、不当にすばらしく愛されている女であると夫人はねたんでいた。小さい姫君がかわいいふうをして前に聞いているのを見ると、夫人の言うほうがもつともであるかもしれないと源氏は思った。それらのことは皆九月のうちのことであった。

姫君が六条院へ移って行くことは簡単にもいかなかった。まずきれいな若い女房と童女

を捜し始めた。九州にいたころには相当な家の出でありながら、田舎へ落ちて来たような女を見つけ次第に雇って、姫君の女房に付けておいたのであるが、脱出のことがにわかに行なわれたためにそれらの人は皆捨てて来て、三人のほかにはだれもいなかった。京は広い所であるから、市女^{いちめ}というような者に頼んでおくと、上手^{じょうず}に捜してつれて来るのである。だれの姫君であるかというようなことはだれにも知らせないのである。いったん右近の五条の家に姫君を移して、そこで女房^えを選り^えととのえもし衣服^{したく}の仕度も皆して、十月に六条院へはいった。源氏は新しい姫君のことを花散里に語った。

「私の愛していた人が、むやみに悲観して郊外のどこかへ隠れてしまっていたのですが、子供もあつたので、長い間私は捜させていたのですがなんら得る所がなくて、一人前の女になるまでほかに置いたわけなのですがその子のことが耳にはいった時にすぐにも迎えておかねければと思って、こちらへ来させることにしたのです。もう母親は死んでいるのです。中将をあなたの子供にしてもらっているのですから、もう一人あつたっていいでしょう。世話をしてやってください。簡単な生活をして来たのですから、田舎風なことが多いでしょう。何かにつけて教えてやってください」

「ほんとうにそんな方がおありになったのですか。私は少しも知りませんでした。お嬢さ

んがお一人で、少し寂しすぎましたから、いいことですね」

花散里はおおように言っている。

「母親だった人はとても善良な女でしたよ。あなたも優しい人だから安心してお預けすることができるのです」

などと源氏が言った。

「母親らしく世話を焼かせていただくこともこれまではあまり少なくて退屈でしたから、いいことだと思います、ごいっしょに住むのは」

と花散里は言っていた。女房たちなどは源氏の姫君であることを知らずに、

「またどんな方をお迎えになるのでしょうか。同じ所へね。あまりに奥様を古物扱いにあそばすではありませんか」

と言っていた。

姫君は三台ほどの車に分乗させた女房たちといっしょに六条院へ移って来た。女房の服装なども右近が付いていたから田舎いなかびずに調えられた。源氏の所からそうした人たちに入り用な綾あやそのほかの絹布類は呈供してあったのである。

その晩すぐに源氏は姫君の所へ来た。九州へ行っていた人たちは昔光源氏という名は聞

いたこともあつたが、田舎住まいをしたうちにそのまれな美貌びぼうの人がこの世に現存していることも忘れていて今ほのかな灯ひの明りに几帳きちょうの綻ほころびから少し見える源氏の顔を見ておそろしくさえたのであつた。源氏の通つて来る所の戸口を右近があげると、

「この戸口をはいる特権を私は得ているのだね」

と笑いながらはいつて、縁側の前の座敷へすわつて、

「灯があまりに暗い。恋人の来る夜のようにではないか。親の顔は見たいものだと聞いているがこの明りではどうだろう。あなたはそう思いませんか」

と言つて、源氏は几帳を少し横のほうへ押しやった。姫君が恥からずかしがつて身体からだを細くしてすわっている様子に感じよさがあつて、源氏はうれしかった。

「もう少し明るくしてはどう。あまり気どりすぎているように思われる」

と源氏が言うので、右近は燈心を少し掻かき上げて近くへ寄せた。

「きまりを悪がりすぎますね」

と源氏は少し笑つた。ほんとうにと思つているような姫君の目つきであつた。少しも他人のようには扱わないで、源氏は親らしく言う。

「長い間あなたの居所がわからないので心配ばかりさせられましたよ。こうして逢あうこと

ができて、まだ夢のような気がしてね。それに昔のことが思い出されて堪えられないものが私の心にあるのです。だから話もよくできません」

こう言つて目をぬぐう源氏であつた。それは偽りでなくて、源氏は夕顔との死別の場を悲しく思い出しているのであつた。年を数えてみて、

「親子であつてこんなに長く逢えなかつたというようなことは例もないでしょう。恨めしい運命でしたね。もうあなたは少女のように恥ずかしがつてばかりいてよい年でもないのですから、今日までの話も私はしたいのに、なぜあなたは黙つてばかりいますか」

と源氏が恨みを言うのを聞くと、何と言つてよいかわからぬほど姫君は恥ずかしいのであつたが、

「足立たずで（かぞいろはいかに哀れと思ふらん三とせになりぬ足立たずして）遠い国へ流れ着きましたところから、私は生きておりましたことか、死んでおりましたことかわからないのでございます」

とほのかに言うのが夕顔の声そのままの語音ごいんであつた。源氏は微笑を見せながら、

「あなたに人生の苦しい道をばかり通らせて来た酬むくいは私がしないでだれにしてもらえますか」

と言つて、源氏は聡明らしい姫君の言いぶりに満足しながら、右近にいろいろな注意を与えて源氏は帰った。

感じのよい女性であつたことをうれしく思つて、源氏は夫人にもそのことを言つた。

「野蠻な地方に長くいたのだから、氣の毒なものに仕上げられているだろうと私は輕蔑していたが、こちらがかえつて恥ずかしくなるほどでしたよ。娘にこうした麗人を持つているということを世間へ知らせるようにして、よくおいでになる兵部卿の宮などに懊惱をおさせするのだね。恋愛至上主義者も私の家ではきまじめな方面しか見せないのも妙齡の娘などがないからなのだ。たいそうにかしずいてみせよう、まだ成つていない貴公子たちの懸想ぶりをたんと拝見しよう」

と源氏が言つと、

「変な親心ね。求婚者の競争をあおるなどとはひどい方」

と女王は言つた。

「そうだった、あなたを今のような私の心だったらそう取り扱ふのだった。無分別に妻などにはしないで、娘にしておくのだつた」

夫人の顔を赤らめたのがいかにも若々しく見えた。源氏は硯を手もとへ引き寄せながら、

無駄書きのように書いていた。

恋ひわたる身はそれながら 玉鬘 たまかづら いかなる筋を尋ね来つらん

「かわいいそうに」

とも独言 ひとりごと しているのを見て、玉鬘の母であつた人は、前に源氏の言つたとおりに、深く愛していた人らしいと女王は思つた。

源氏は子息の中将にも、こうこうした娘を呼び寄せたから、氣をつけて交際するがよいと言つたので、中將はすぐに玉鬘の御殿へ訪ねて行つた。

「つまらない人間ですが、こんな弟がおりますことを御念頭にお置きくださいまして、御用があればまず私をお呼びになつてください。こちらへお移りになりました時も、存じないものでお世話をいたしませんでした」

と忠実なふうに言うのを聞いていて、真実のことを知っている者はきまり悪い氣がするほどであつた。物質的にも一所懸命の奉仕をしていた九州時代の姫君の住居も現在の六条院の華麗な設備に思い比べてみると、それは田舎らしいたまらないものであつたようにお

とどなどは思われた。すべてが洗練された趣味で飾られた気高い家^{けだか}にいて、親兄弟である親しい人たちは風采^{ふうさい}を始めとして、目もくらむほどりっぱな人たちなので、こうなっではじめて三条も大貳を輕蔑^{けいべつ}してよい氣になった。まして大夫^{たゆう}の監^{げん}は思い出すだけでさえ身ぶるいがされた。何事も豊後介^{ぶんごのすけ}の至誠^{たまもの}の賜物であることを玉鬘も認めていたし、右近もそう言つて豊後介を賞^ほめた。確^{しか}とした規律のある生活をするのにはそれが需要であると言つて、玉鬘付きの家従や執事が決められた時に豊後介もその一人に登用された。すっかり田舎上がりの失職者になつていた豊後介はにわかに朗らかな身の上になった。かりにも出入りする便宜などを持たなかつた六条院に朝夕出仕して、多数の侍を従えて執務することのできるようになったことを豊後介は思いがけぬ大幸福を得たと思つていた。これらもすべて源氏が思いやり深さから起こつたことと言わねばならない。

年末になつて、新年の室内装飾、春の衣裳^{いしやう}を配る時にも、源氏は玉鬘を尊貴な夫人らと同じに取り扱つた。どんなに思ひのほかによい趣味を知つた人に見えても、またどんなまちがった物の取り合わせをするかもしれぬという不安な気持ちもあつて、玉鬘のほうへはすでに衣裳にでき上がった物を贈ることにしたが、その時にほうぼうの織物師が力いっぱい念を入れて作り出した厚織物の細長や小桂^{こうちぎ}の仕立てたのを源氏は手もとへ取り寄

せて見た。

「非常にたくさんありますね。奥さんたちなどにもそれぞれよい物を選^えって贈ることにしよう」

と源氏が夫人に言ったので、女王は裁縫係の所にでき上がっている物も、手もとで作らせた物もまた皆出して源氏に見せた。紫の女王はこうした服飾類を製作させることに趣味と能力を持っている点でも源氏はこの夫人を尊重しているのである。あちらこちらの打ち物の上げ場から仕上がって来ている糊^{のり}をした打ち絹も源氏は見比べて、濃い紅^{べに}、朱の色などとさまざまに分けて、それを衣^{ころも}櫃^{びつ}、衣服箱などに添えて入れさせていた。高級な女房たちがそばにいて、これをそれに、それをこれにというように源氏の命じるままに贈り物を作っているのであった。夫人もいっしょに見えて、

「皆よくできているのですから、お召しになるかたのお顔によく似合いそうなのを見立てておあげなさいまし。着物と人の顔が離れ離れなのはよくありませんから」

と言うと、源氏は笑って、

「素知らぬ顔であなたは着る人の顔を想像しようとするのですね。それにしてもあなたはどれを着ますか」

と言つた。

「鏡に見える自分の顔にはどの着物を着ようという自信も出ません」

さすがに恥ずかしそうに言う女王であつた。紅梅色の浮き模様のある紅紫の小桂、薄い臙脂紫の服は夫人の着料として源氏に選ばれた。桜の色の細長に、明るい赤い掻練を添えて、ここの姫君の春着が選ばれた。薄いお納戸色に海草貝類が模様になつた、

織り方にたいした技巧の跡は見えながらも、見た目の感じの派手でない物に濃い紅の掻練を添えたのが花散里。真赤な衣服に山吹の花の色の細長は同じ所の西の対の姫君の着

料に決められた。見ぬようにしながら、夫人にはひそかにうなずかれるところがあるので

ある。内大臣がはなやかできれいな人と見えながらも艶な所の混じつていない顔に玉

鬘の似ていることを、この黄色の上着の選ばれたことで想像したのであつた。色に出し

て見せないのであるが、源氏はそのほうを見た時に、夫人の心の平静でないのを知つた。

「もう着る人たちの容貌を考えて着物を選ぶことはやめることにしよう、もらつた人に腹をたてさせるばかりだ。どんなによくできた着物でも物質には限りがあつて、人の顔は醜くても深さのあるものだからね」

こんなことも言いながら、源氏は末摘花の着料に柳の色の織物に、上品な唐草の織

られてあるのを選んで、それが艶な感じのする物であつたから、人知れず微笑ほほえまれるのであつた。梅の折り枝の上に蝶ちょうと鳥の飛びちがつている支那風しなな氣のする白い桂うちぎに、濃い紅の明るい服を添えて明石夫人あかしのが選ばれたのを見て、紫夫人は侮辱されたのに似たような氣が少しした。空蟬うつせみの尼君には青鈍色あおにびの織物のおもしろい上着を見つけ出したのへ、源氏の服に仕立てられてあつた薄黄の服を添えて贈るのであつた。同じ日に着るようにとどちらへも源氏は言い添えてやつた。自身の選定した物がしつくりと似合っているかを源氏は見に行こうと思うのである。

夫人たちからはそれぞれの個性の見える返事が書いてよこされ、使いへ出した纏頭てんとうもさまざまであつたが、末摘花は東の院にいて、六条院の中のことでないから纏頭などは氣のきいた考えを出さねばならぬのに、この人は形式的にするだけのことはせずいらぬ性格であつたから纏頭も出したが、山吹色の桂うちぎの袖そでぐち口くちのあたりがもう黒ずんだ色に変色したのを、重ねもなく一枚きりなのである。末摘花女王すえつむはなによおうの手紙は香かおの薫りのする檀紙だんしの、少し年数物になつて厚く膨ふくれたのへ、

どういたしましょう、いただき物はかえつて私の心を暗くいたします。

着て見ればうらみられけりから衣かへしやりてん袖を濡らして

と書かれてあつた。字は非常に昔風である。源氏はそれをながめながらおかしくてならぬような笑い顔をしているのを、何があつたのかというふうに夫人は見ていた。源氏は使いへ末摘花の出した纏頭のまづいを見て、機嫌の悪くなったのを知り、使いはそつと立つて行つた。そしてその侍は自身たちの仲間とこれを笑い話にした。よけいな出すぎたことをする点で困らせられる人であると源氏は思っていた。

「りつばな歌人なのだね、この女王は。昔風の歌詠みはから衣、袂濡るるといふ恨みの表現法から離れられないものだ。私などもその仲間だよ。凝り固まっていて、新しい言葉にも表現法にも影響されないとこころがえらいものだ。御前などの歌会の時に古い人らが友情を言う言葉に必ずまどいという三字が使われるのもいやなことだ。昔の恋愛をする者の詠む歌には相手を悪く見て仇人という言葉を三句めに置くことにして、それをさえ中心にすれば前後は何とでもつくと思つたものらしい」

などと源氏は夫人に語つた。

「いろんな歌の手引き草とか、歌に使う名所の名とかの集めてあるのを始終見ていて、そ

の中にある言葉を抜き出して使う習慣のついている人は、それよりほかの作り方ができないものと見える。常陸^{ひたち}の親王のお書きになった紙屋紙^{かみやがみ}の草紙というのを、読めと言つて女王^{にようわう}さんが貸してくれたがね、歌の髓^{ずい}のう、歌の病^{やまい}、そんなことがあまりたくさん書いてあったから、もともとそのほうの才分の少ない私などは、それを見たからといって、歌のよくなる見込みはないから、むずかしくてお返ししましたよ。それに通じている人の歌としては、だれでもが作るような古いところがあるじゃないかね」

滑稽^{こっけい}でならないように源氏に笑われている末摘花の女王はかわいそうである。夫人はまじめに、

「なぜすぐお返しになりましたの、写させておいて姫君にも見せておあげになるほうがよかったですようにね。私の書物の中にも古いその本はありましたけれど、虫^{むし}が穴をあけて何も読めませんでした。その御本に通じていて歌の下手^{へた}な方よりも、全然知らない私などはもっとひどく拙^{つたな}いわけですよ」

と言つた。

「姫君の教育にそんなものは必要でない。いったい女というものは一つのこと熱中して専門家的になつていることが感じのいいものではない。といって、どの芸にも門外の人で

あることはよくないでしょうがね。ただ思想的に確かな人にだけしておいて、ほかは平穩きずで瑕のない程度の女に私は教育したい」

こんなことを源氏は言っていて、もう一度末摘花へ返事を書こうとするふうののないのを、夫人は、

「返しやりてん、とお言いになったのですから、もう一度何とかおっしゃらないでは失礼ですわ」

と言つて、書くことを勧めていた。人情味のある源氏であつたから、すぐに返歌が書かれた、非常に樂々と、

かへさんと言ふにつけても片しきの夜の衣を思ひこそやれ

ごもつともです。

という手紙であつたらしい。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

玉鬘

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>